

行動する後の宮
—— 『枕草子』における定子像 ——

藤 本 宗 利

A study of Makuranosoushi IV

Munetoshi FUJIMOTO

行動する後の宮

——『枕草子』における定子像——

群馬大学教育学部国語教育講座 藤本宗利

一、「清涼殿の丑寅の隅の」段概観

「清涼殿の丑寅の隅の」の段は、とある春の一日、宮中は清涼殿の描写から始まる。上御局の御前の簀子に据えられた青磁の大瓶に、大ぶりの枝を幾本も、見事な桜が活けられている。その花のもとに座している貴公子は、中宮の兄である大納言伊周の君。彼は折に合った桜襲さくらがさねの直衣に、濃き紫の指貫を合わせるといふ、優美な出で立ちである。御簾際まで応対に出て、その伊周と言葉を交わす女房たちも、同じく桜襲の唐衣に、藤襲・山吹襲の桂などといった華やかな装い。いかにものどやかな円居である。

大納言殿、桜の直衣なほしの少しなよらかなるに、濃き紫の固紋かたもんの指貫ゆびぬき、白き御衣ごえども、うへには濃き綾の、いとあざやかなるを出だして、まゐりたまへるに、上のこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐるたまひて、物など申したまふ。御簾みすずの内に、女房、桜の唐衣からぎぬどもくつらかに脱ぎ垂れて、藤、山吹など、色々好ましうて、あまた小半部こはんぶの御膳ごぜんよりも押し出でたるほど、昼ひの御座ごましの方かたには、御膳ごぜんまるる足音高し。警蹕けいひちなど、「おし」と言ふ声聞ゆるも、うらうらとのどやかなる日のけしきなど、いみじう

をかしきに、果ての御盤ごばん取りたる蔵人まゐりて、御膳奏すれば、中の戸よりわたらせたまふ。
やがて昼の御座に御膳が整えられて、帝は食事のためにそちらにおいでになる。そのお供をした大納言が戻つて来て、最前の花瓶の近くに座る。と、奥からは中宮がお出ましになつて、女房たちとともに、兄との会話に加わつて来るといふのである。

御供ごきに廂ひさしより大納言殿御送りにまゐりたまひて、ありつる花のもとに帰りゐるたまへり。宮の御前ごまへの、御几帳みきちょう押しやりて、長押ながしのにもとに出でさせたまへるなど、何となくただめでたきを、候まをふ人も、思ふことなき心地するに、「月も日もかはりゆけども久ひさに経るみむろの山の」といふことを、いとゆるるかにうち出だしたまへる、いとをかしうおぼゆるにぞ、げに千歳ちとせもあらまほしき御ありさまなるや。

その様子の「めでた」さを、女房たちもみな「思ふことなき心地」で見ている折から、大納言が古歌を朗誦する。その素晴らしさと言つたら、千年もそのままに眺めていたような有様だったというのである。伊周の口ずさんだ古歌は、『万葉集』卷一三の「月は日は変はらひぬとも久に経る三諸みもろの山の離宮所とりみやどころ」という一首が、伝承過程で形を

変えたもの。

ところでこの場面、女房たちが「何となくただめでたき」と評した中宮の行動に注意したい。彼女は「御几帳押しやりて、長押のもとに出で」て来たという。「長押」とは、いわゆる下長押のこと。寢殿造の構造においては母屋もやと廂ひさしとの境、廂と簀子すいことの境に当たたる段差をその名で呼んでいる。この場合、中宮が廂の間まにいる女房と同じ座に列したとは、少々考え難いので、母屋と廂の境の長押を指していると考えるのが適當だろうと思われる。いずれにしろ、その長押のもとまで中宮が出て来たのは、廂の間に控える女房たちや外にいる伊周との談話に加わることを目的としているのは確実なので、この行為は定子という女主人の親しみやすい性格を示すと見て間違いない。「めでたき」という女房たちの賞讃も、そういう陽気で開放的な気風に向けられたものだと考えられる。

二、遮蔽の具としての几帳

ところで「御几帳押しやりて」という彼女の行為が、当時の読者にとつて、どのような意義を有するものであつたかを考えてみたい。

几帳とは、室内を仕切つたり隔てたりする調度の一つで、木製の台（土居つちい）と称する）の上に細い柱を二本立て、その上に渡した横木に布（帷子かたびら）と称する）を垂らした屏障具。室内での移動が容易であり、三尺のものと四尺のものが一般的。四尺の几帳は主として御簾際などに立てて、外部からの視線を遮るために使用される。対して三尺の方は、人物の身近に置かれ、その陰に座すことによつて人目を遮る目的で用いられることが多い。

次に挙げるくだりなどは、その「人目を遮る」という役割を、端的に果たしている用例であろう。

宮にはじめてまゐりたるころ、もののはづかしきことの数知ら

ず、涙も落ちぬべければ、夜々よよまゐりて、三尺の御几帳のうしろに候まちふに、絵など取り出でて見せさせたまふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。

〔宮にはじめてまゐりたるころ〕段、傍線は引用者、以下同じ）
三尺の御几帳一よろひをさしちがへて、こなたの隔てにはして、そのうしろに、畳一ひらを長さまに縁へしを端にして、長押の上うへに敷きて、中納言の君といふは、殿の御叔父おぢの右兵衛督忠君ただのむねと聞えけるが御むすめ、宰相の君は富小路とみこうぢの右の大おとど臣の御孫、それ二人ふたりぞ上うへにゐて見たまふ。〔関白殿、二月二十一日に〕段

前者は、清少納言が定子中宮のもとに出仕して間もないころの、回想をつづつた章段の一節。まだ宮仕えに慣れていないため、人前にいること自体がきまり悪く、ともすれば泣き出しそうになる自分を、強いて奮い立たせるかのように、毎日夜になるのを待つて御前上ごぜんじやうがつては、三尺の几帳の陰に隠れていたというのである。数年後には、殿上人が中宮御所をおとなうたばに、「清少納言など出であひて、少々の若き人などにも勝まさりて、をかしう誇ほりかなるけはひを、なほ捨てがたくおぼえて」〔『榮花物語』とりべ野〕と記されるほど、定子後宮の「看板」的な立場を担うことになるこの女性に、こんな初々しい新参の時代があつたというのも興味深い。

後者の例も、まだ出仕して日も浅いころ、中宮の父関白・藤原道隆が法興院の積善寺という御堂において一切経供養を催した折の回想をまとめた章段の一節。法会を見物する中宮御前の様を描写したくだりで、「こなたの隔て」すなわち外部との仕切りとするべく、三尺の几帳一双を互い違いに立てた後ろに、畳を横長に敷き、その上に中納言・宰相という二人の上臈女房が座して見物していたというのである。

いずれの場合も、几帳を立てた後方に人物が座つて、自らの姿を、外から注がれる視線から隠していると描かれていることに、改めて注目したい。

対して、四尺の几帳の用例は次のごとくである。

松の木立高き所の、東南の格子上げわたしたれば、涼しげに透きて見ゆる母屋に、四尺の几帳立てて、その前に円座置きて、四十ばかりなる僧の、いと清げなる、墨染の衣、薄物の袈裟、あざやかに装束きて、香染の扇を使ひ、せめて陀羅尼をよみたるなり。

〔松の木立高き所の〕一段

これは、物の怪に苦しむ上流婦人の祈祷のために、病床に僧が呼ばれている状況を描いているくだけり。先の二例と異なりこちらの場合は、視線が僧の立ち居振る舞いに向けられているため、几帳の前に彼の座がしつらえられていると述べられるばかりで、後方に誰がいるとは記されていない。推察するに高貴な身分と思しい病者の寢床（「帳台」と称する）は、その四尺の几帳から少し奥まって設けられ、その近くにはさらに三尺の几帳を添えて、病臥の姿を隠しているのである。

場面はさらに加持祈祷の様子が詳細に描写されるのだが、そこに同時代における几帳の機能が現れているようで興味深い。以下、少しく本文を引用しつつ、その展開を追ってみよう。

物の怪にいたうなやめば、うつすべき人とて、大きやかなる童女の、生絹の単衣、あざやかなる袴、長う着なしてあざり出でて、横ざまに立てたる几帳のつらにゐたれば、（僧は）とざまにひねり向きて、いとあざやかなる独鉗を取らせて、うち拝みてよむ陀羅尼も尊し。

（同段、（ ）の補いは引用者、以下同じ）

病者はおそらくこの家の女主人と思しい。その人をひどく悩ませている物の怪を、加持祈祷によつて退散させなくてはならない。そのために僧は、病者から引き離れた物の怪を、仮に憑依させるべき身体を近くに置くという。「よしまし」と称される役目を負うのは、齢若い娘であることが多く、この場合は主人に仕える童女であつたらしい。彼女は物の怪に憑かれて正気を失っているのか、汗衫なども脱ぎ捨て

たと見えて、袴の上には肌を透かす生絹の単衣一枚を羽織つただけというしどけない姿で、「横ざまに立てたる几帳のつら」、すなわち部屋横の方に立てた几帳の前までいざつて出て来たというのである。母屋の周囲に几帳を立てて、女房たちが病床を見守るべく控えていたと思しく、この童女自身も最前までは、几帳の陰に座していたものであろう。

僧はその童女の手独鉗を持たせて、さらに陀羅尼を誦する。すると間もなく彼女は、身震いしだして、完全に正気を失つたようだ。主人のまわりでこの成り行きを見守る女房たちはもちろん、病人の兄弟や従兄弟といった男性たちの目にさらされている状況を、もしも常の心であればどんなにか恥じ入ったことであろう。憑依した物の怪が、童女の口を借りて苦しがつて泣くのを、童女の知り人たちは気の毒がつて、着物の乱れを直してやつたりする。

しかしそのお蔭で、病者は少し楽になつて、容態が安定する。

（僧は、物の怪に）いみじうことわりなど言はせてゆるしつ。
（童女は）「几帳の内にとこそ思ひしか、あさましくもあらはに出でにけるかな。いかなる事ありつらむ」と、はづかしくて、髪をふりかけて、すべり入れば、「しばし」とて、加持すこしうちして、「いかにぞや、さはやかになりたまひたりや」とて、うち笑みたるも、心はづかしげなり。

僧は、物の怪を叱責して、退散することを誓わせ、放免してやる。憑依状態から醒めた童女は、正気を失つていた時の自分の行動を恥じ、とつさに自分の髪で顔を覆うと、几帳の陰に身を隠そうと逃げ入ろうとする。その童女のためにも、僧は加持祈祷をしてやつて、取り敢えず女主人の病状が落ち着いたことに、安堵の笑みを浮かべるといふのである。

これらの例から、「几帳」という調度の特徴が立ち顕われて来よう。几帳は他者の視線をさえぎるといふ機能を有している。その点で、

格子や蓐と同様であるが、それが固定された位置でのみ、外と内とを仕切つて遮蔽機能を發揮し得るのに対して、こちらは室内のどこにも移動でき、内部を隠すことが可能であるという点に大きな特徴がある。言わば几帳とは、室内に随意に置かれたその場所で、その前側とうしろ側とを隔て、当座的に「外」と「内」とを仕切る境界なのである。

三、高貴さの演出のための几帳

ところでこの用例で特に興味深いのは、正気を取り戻した童女の、初めに口にした言葉が、「几帳の内にとこそ思ひしか」というものであつて、自らの姿が「あらはに」人目にさらされてしまったことを恥じ入り、「髪をふりかけて、すべり入」つてゐる点であろう。このことは見方を換えると、同時代において、正気でも失わない限り、女性が自ら几帳の外に出て、衆目にさらされるような行動はおこさなということを示している。

そう言えば「宮にはじめてまゐりたるころ」段・「関白殿、二月二十一日に」段の両例とも、几帳のうしろ側に控えていると描かれているのは共に女性である。この時代の女性にとつて、他者の眼にさらされる危険性から逃れるために、几帳がいかに頼るべき存在であつたか裏付けよう。

こうした傾向は、同時代の『源氏物語』でも認められる。

（源氏が）御直衣など奉るとて、御簾ひき上げて入りたまふに、短き御几帳引き寄せて、はつかに見ゆる御袖口は、さ（＝紫上）にこそはあらめと（夕霧は）思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地する心地もうたてあれば、外さまに見やりつ。
（野分）

右は夕霧少年が、父の光源氏のもとに野分見舞いにやつて来る場面。父が着替えのために室内に入つて行くのを、彼自身は御簾の外に

控えて待つてゐると、父が御簾をひき上げた瞬間に、ちらりと部屋の中の様子が見えた。几帳の陰に、ほんのわずかにのぞいている袖口こそ、紫上のそれであろうと思うと、夕霧は苦しいまでの胸の高鳴りをおぼえた。なぜなら彼は、その前夜、野分の騒ぎに紛れて、紫上の美しさを垣間見ていたのであつたから、というのである。

「短き几帳」とあるから三尺の几帳であろう。それを「引き寄せて」とあるが、「はつかに見ゆる御袖口」と描くのみで、この几帳のうしろに女主人が座していることが想像され、それを見る少年の心の動揺までも推察されるような見事な筆致である。

この場合、几帳を身近に置く用意は、御簾の外にいる夕霧、すなわち紫上にとつては義理の息子の眼を憚つてということであろう。

これに対して、次の用例は同じ部屋の中にながら、相手の男性との直接の対面を避ける場合である。

女君（＝玉鬘）、あやしうなやましげにのみもてないたまひて、すぐよかなるをりもなくしほれたたまへるを、（源氏が）かく渡りたまへればすこし起き上がりたまひて、御几帳に、はた、隠れておはす。
（真木柱）

心ならずも鬚黒大将の妻となつた玉鬘は、その後体調もすぐれず、涙にくれる日々であつた。そんな彼女の部屋に、源氏が訪れたので、臥せていた玉鬘が起き上がつて、几帳の陰に隠れたというのである。自分に対する源氏の好意を認識していればこそ、鬚黒のような無骨漢の手に落ちた不幸な我が身を、源氏の手前恥じ入るとともに、不本意とはいうものの夫を持つ身の上で、他の男性との対面を避けるという意味合いもあろう。

いずれの場合も、ひとかどの身分の女性は几帳のうしろに座して、姿を隠すべきという当時の通念を反映していると推察される。

さらに言えば『源氏物語』の場合、このような振舞いは、その女性の貴女としてのたしなみや奥ゆかしさを感じさせるもの、という好意

的評価につながって行くことが多いのが特徴。

(明石君は) なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと(源氏は) 思したり。人々もかたはらいたがれば、しぶしぶにるぎり出でて、几帳にはた隠れたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。

〔松風〕

この例などはその典型。上京して大堰川のほとりの山荘に住まう明石君のもとに、源氏が訪れる。明石で別れて以来、久しぶりの再会に、嬉しさよりも、かえって心乱れて、彼女は起き上がりもできずにいる。自分のはるばる嵯峨野まで足を運んだというのに、すぐに迎えない女君を、あまりにも上品ぶつた態度と、源氏は思う。女房たちにも促されて、ようやく彼の前に出て来た彼女は、几帳の陰に隠れて座す。その優美で奥ゆかしく、なよやかな風情は、皇女と言っても通るような品格だというのである。

実際の身分としては受領の娘に過ぎぬこの女性が、その立ち居振舞いや気高い心かげによって、皇女というこの上ない身分とも見えるようだというのであるが、その上品さの印象を「几帳にはた隠れたるかたはら目」によって表現した物語の演出に注目したい。

確かにこの女性には、几帳に隠れるという振舞いが良く似合う。

(源氏が) 中の御障子よりふと渡りたまへれば、(明石君は) えしもひき隠さで、御几帳をすこし引き寄せて、みづからははた隠れたまへり。——中略——(源氏が) 御几帳を引きやりたまへれば、(明石は) 母屋の柱に寄りかかりて、いとときよげに、心恥づかしげなるさましてものしたまふ。

〔若菜・上〕

この例は、今や紫上に次ぐ夫人として、源氏の大邸宅・六条院に住まう明石君の御殿を、光源氏が訪れる場面。折から彼女は、明石の地に残して来た父の入道から届いた文を読んでいたのだが、急な源氏のお越しにその文の片付けも間に合わず、取り急ぎ自らは几帳に隠れ

る。源氏は明石君としんみりと語り合うべく、その几帳を押しよけると、彼女は「いとときよげに、心恥づかしげなるさま」で座っているという展開である。源氏さえ気がひけるほどの上品な美という点では、先の松風巻の例において皇女に匹敵する風情と賞讃されていたことと共通している。

その一方でこの女性は、自らの出自や立場に対する卑下の態度を持ち続ける。その謙譲の意識が、彼女をして几帳を引き寄せさせ、光源氏との間に隔てを置かせるのであろう。こうした姿勢が、先の真木柱巻における玉鬘の例と通い合う点は看過すべきではない。この物語が、几帳に隠れる貴女を繰り返し描いているのは、同時代の通念を反映するものという考察については先述したが、こうした振舞いの奥には、他者の前に我が身を憚るという姿勢が底流しているというのが、『源氏物語』の発想なのである。

このような謙譲の姿勢こそ淑女のたしなみという美意識は、明石君の周辺に顕著に見て取れる。たとえば次の例。

(明石女御の) 御前にことに人もさぶらはず、尼君ところ得ていと近くさぶらひたまふ、「あな見苦しや。短き御几帳ひき寄せてこそさぶらひたまはめ。風など騒がしくて、おのづから綻ひの隙もあらむに。医師などやうのさまして。いと盛り過ぎたまへりや」など、(明石君は) なまかたはらいたく思ひたまへり。

〔若菜・上〕

先の用例と同じく若菜・上巻から、明石君が母の尼君の行為にいたく感懐を述べたくだりである。折から出産に備えて、内裏から六条院に里下がりしている明石女御の御前に、尼君が近く侍っていることに対して、「見苦し」と感じ、「短き御几帳ひき寄せて」控えているべきなのに、と非難しているのである。年老いてすっかり女性らしさも失せ、「医師」かなんぞのようにしか見えぬ風体で、自ら腹を痛めたと言いながら、今や東宮妃となつている娘の傍に侍るなど、無礼に過ぎ

ようというものと思う。

そもそも出家者が俗世の人と交流する時、直接の対面を憚って几帳を置くということは、他の場面でも見られ、明石君独自の価値観ではない。

〔弁の尼の〕隠ろへたる几帳を〔薫は〕すこし引きやりて、こまやかにぞ語らひたまふ。げにむげに思ひほけたるさまながら、ものうち言ひたる気色、用意口惜しからず、ゆゑありける人のなごりと見えたり。 〈早蕨〉

〔薫は〕弁の尼召し出でたれば、障子口に青鈍の几帳さし出でて参れり。「いとかしこけれど、ましていと恐ろしげにはべれば、つつましくてなむ」と、まほには出で来ず。 〈宿木〉

〔薫は〕弁の尼の方に立ち寄りたまへれば、〔弁は〕いと悲しと見たてまつるにただひそみにひそむ。〔薫は〕長押にかりそめにゐたまひて、簾のつま引き上げて物語したまふ。〔弁は〕几帳に隠ろへてゐたり。 〈東屋〉

右はいずれも宇治十帖からの引用で、光源氏の子である薫という貴公子と、宇治の八宮邸に伺候する弁という老尼の対面の場面である。弁はこの宮家の女房であったが、八宮とその長女・大君の没後、尼となって菩提を弔っている。この女性、早蕨巻には「むげに思ひほけたるさま」とあつて、相当な老齢と見えるし、宿木巻には「ましていと恐ろしげにはべれば」とあつて、老いた出家姿の見苦しさを自認していることも明らかである。

それゆえ几帳に隠れての対面ということになるが、貴公子と几帳越しに語るといふ状況が、一方では先述のごとく「貴女らしき」の雰囲気漂わすからこそ、宿木巻の用例で弁は「いとかしこけれど」と詫びているのであろう。実際、彼女のもの腰や声遣いなどはそれなりの風情があつて、「ゆゑありける人のなごり」〈早蕨〉と薫の眼には映っている。

これらの用例の「几帳」は、三尺の几帳を指すと考えるべきで、先の若菜・上巻の引用における「短き御几帳」と同様のもの。すなわち、明石君が尼君に望んだのは、まさに宇治の巻々における弁の尼と同趣の振舞いであつたということになる。

改めて明石君の独白を見よう。この「短き御几帳」は女御に対する礼儀として尼姿を隠す目的であると同時に、外部からの視線を意識されてもいるということに注意したい。「風など騒がしくて、おのづから綻びの隙もあらむ」と、明石君が危惧しているのは、女御が不快に感ずることではない。部屋周囲などに立てた几帳——おそらく四尺の几帳の帷子が風に吹かれて、その隙間から、御前に憚りもなく侍っている老尼の姿が、他者の眼にさらされては見苦しいということなのである。

「綻び」とは几帳の帷子の、縫い合わされていない部分のことを言う。四尺の几帳を立てただけでは、その綻びの隙間から自ずと内部の様子がほの見えることがある。せめて身近に三尺の几帳を立てることで、自らの老いた出家姿を、世間に対して憚るだけの卑下の姿勢を持つてしかるべきだというのが、明石君の批判の実態なのである。

ここに至つて几帳という調度の特異性が立ち顕われて来よう。それはすでに視線をさえぎるだけの用具ではない。その陰に隠れることによつて、かえつてその貴女としてのたしなみの深さを印象付けることができる、言わば「女性らしき」の自己演出の道具なのである。

四、几帳を押しやる行為の心象性

このように見てくると、冒頭に引いた『枕草子』『清涼殿の丑寅の隅の』の段における定子中宮の行動の独自性が際立って見えよう。ここでは「宮の御前の、御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへる」と描かれ、それに対して「何となくただめでたき」と評されて

いるのである。

見て来たように、女性は几帳の陰に隠れるものと描かれるのが常套的である中で、これは何と鮮烈な行動であろうか。

先述したごとく、これは清涼殿の東北、弘徽殿の上御局における出来事を描く章段である。言うまでもなく帝のお召しがあつて中宮はここに参上しているのであり、また本文に「上のこなたにおはしませば」とあつて、帝自らがこちらに向向しているということがわかる。

さらにそのことを聞いた大納言伊周が、室内に入るのを遠慮して「戸口の前なる細き板敷にゐたまひ」と述べられているところから推して、帝はさきほど食事のために昼の御座に移動してゆく直前まで、中宮の御帳台の内に入つていたのだと考えられよう。

ということ、ここに記されている几帳は、この帳台の近くに立てられたもの、おそらくは三尺の几帳だと思しい。すなわち『源氏物語』において、女性の登場人物が繰り返しの陰に隠れることによつて、奥ゆかしく気品高い印象や、たしなみのある女性らしさを演出してきたのと、同じ調度なのである。

ところが、定子中宮は陰に隠れるどころか、それを「押しやりて、長押のもとに出で」て来たというのである。これはきわめて特異な行動だと言ふことは、前節の『源氏物語』の用例を見ても明らかである。

ちなみにその『源氏物語』で、「押しやる」およびその活用形は全二三例を数えるが、その内の七例まで「几帳・御几帳」を押しやる用例である。

几帳など、いたくそこなはれたるものから、年経にける立処たちど変まらず、押しやりなど乱れねば、心もとなくて、御達ごたち四五人ゐたり。
（未摘花）

この用例は、貧窮の中にも昔の格式をひたすらに守ろうとする、故常陸宮邸の暮らしぶりを描くくだり。父宮の没後何年経つても、昔立

てた几帳の位置も変わらず、「押しやり」もせずにいる、というのである。

新しうきよげに造りたれど、さすがに荒々しくて隙ひまありけるを、誰たれかは来て見むともうちとけて、穴も塞ふたがず、几帳の帷子うち懸けて押しやりたり。灯明あかうともして物縫ものぬいふ人三四人ゐたり。
（浮舟）

対してこちらの例は、帷子まで上げた几帳を片隅へと押しやつている用例。場所は宇治の邸内である。大君の死後、薫は宇治の宮を御堂に造りなして、そこに大君とよく似た、異腹の妹・浮舟を住まわせていたが、そのことを知つた匂宮が宇治に赴き、薫と見せかけて女に近づくとこの場面である。新造なつた御堂は、田舎家めいて隙間や節穴が目立つたが、こんな山里までやつて来て垣間見をする人もあるまいという油断から、几帳も近く立てずに、女房たちが縫物をしている、というのである。

ちなみにこうした心の緩みは、それに乗じて匂宮が浮舟を我がものとするという事件を招き、女主人の自殺（未遂）という悲劇的結末をもたらしとされる点に注意したい。

昔気質の女房たちが、宮家としての面目を堅苦しいまでに守ろうとする未摘花巻の場合と、宇治という環境が女房たちの心の隙を生じさせると描く浮舟巻の場合と。対照的な二つの状況が、几帳を押しやるか、押しやらないかという差によつて、象徴的に描かれている点に注目したいのである。

これらの用例において、几帳を押しやる主体は、主に女房たちと考えられるが、次の例は両者とは異なつて興味深い。

（浮舟は）行ひなどをしたまふも、なほ数珠ずすずは近ぢかき几帳にうち懸けて、経に心を入れて読みたまへるさま、絵にも描かまほし。

（尼君は）うち見ることに涙のとめがたき心地するを、まいて心かけたまはん男（中將）は、いかに見たてまつりたまはんと思

ひて、さるべきをりにやありけむ、(尼君は)障子の掛金のもとにあきたる穴を(中将に)教へて、紛るべき几帳など押しやりた

り。
〔手習〕

薫と匂宮という二人の貴公子からの愛に苦悩する浮舟は、入水しかけたところを横川の僧都に助けられ、彼の手で授戒。今は妹の小野の尼君のもとで、仏道修行の日々を送る。しかし浮舟の出家を惜しむ尼君は、浮舟に心を寄せる中将に、ひそかに彼女の姿を垣間見させるという場面。

「近き几帳」とあつて、浮舟自身は小野という山里にあつても、油断なく自らの出家姿を隠すべく几帳を立てていることがわかる。その点で、先に引いた浮舟巻の女房たちの心の緩みとは、明らかに一線を画するが、せつかくの彼女の努力も、尼君の作為によつて帳消しになつてしまふという皮肉な展開である。

これなどは、女性を男性に垣間見させようという意図のもとに、他の女性の手で几帳が押しやられる珍しい例と言えよう。

これら三例以外、几帳を押しやると描かれているのは、すべて男性の手による動作であるという点に、注意せねばなるまい。もちろんいずれの場合も、几帳の陰に隠れているのが女性であることは、見てのごとくである。

(源氏は)几帳すこし押しやりたまふ。(玉鬘は)わりなく恥づかしければ、側みておはする様体など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて、「いますこし光見せむや。あまり心にくし」とのたまへば、右近かかげてすこし寄す。
〔花散里は〕御几帳隔てたれど、(源氏が)すこし押しやりたま

へば、またさておはす。
〔初音〕

宮(二女三宮)をも、とかう人々つくるひきこえて、床の下におろしたてまつる。(朱雀院は)御几帳すこし押しやらせたまひて、「夜居加持僧などの心地すれど、(私は)まだ験つくばかりの

行ひにもあらねばかたはらいたけれど、ただ(三宮が)おぼつかなくおぼえたまふらむ(私の)さまを、さながら見たまふべきなり」とて、御目おし拭はせたまふ。
〔柏木〕

女君(二中君)、短き几帳を隔てておはするを、(匂宮は)押しやりて、ものなど聞こえたまふ、御容貌どもいときよらに似あひたり。
〔東屋〕

さらに言えば、この四例のうち、父の朱雀院が女三宮の前に、娘が会いたいと望んでいた我が出家姿を、直接お目にかけていからということで、隔てを取り退けると描かれる柏木巻の例を除けば、いずれの場合も几帳を押しやる男性は、几帳の陰に隠れる相手に対して、異性として何らかの興味関心をいだいていることも重要であろう。

すなわち玉鬘巻では、初めて見る女君が、自分のかつて愛してやまなかつた夕顔の忘れ形見と知つて、その姿かたちに大いに関心を寄せている光源氏の行為として描かれている。また初音巻の用例は、同じく源氏が、花散里のもとに、新年の挨拶をしにおとなう場面の振舞いである。お互いに穏やかな信頼感で結ばれているとは言いながら、肉体関係は絶えて久しいこの女性に、源氏は玉鬘の場合のように懸想の心を持つていゝわけではないのだが、自分が彼女のために見繕つた正月用の装束を、この人がどのように着こなしているのか、関心があるということなのである。

次の東屋巻の例では、几帳を押しやるのは源氏ではなく、彼の孫に当たる匂宮。多情の人であるこの宮様は、最新新しい妻を得て、そちらに入り浸つていたのだが、だからと言つてこちらの妻・中君への愛情が衰えたわけではない。中君としてはそんな夫の薄情を、恨むという程ではないにしろ、少々拗ねて見せた「几帳を隔て」であつたらうが、宮の方はそんなことなど気にも留めず、几帳を押しのかわいい人と顔を見合せて愛を語らう。そうしてそのまま彼女の手を取つて、御帳台の中へといざなつて行くのである。

五、几帳の同時代的心象

几帳の陰に隠れる女と、その几帳を押しつける男——『源氏物語』におけるこうした表現の類型的な傾向は、「押しやる」のみに認められるものではない。たとえば先に引用した若菜・上巻の用例では、明石君の「引き寄せて」「隠れ」ていた几帳を、源氏が「引きや」つたと描かれていることとくである。一方、早蕨巻の用例は、陰に「隠ろへたる」弁の尼と、直に対面すべく、薫が几帳を「引きや」つたと描かれている。こちらの方は、愛する大君を喪つた薫が、彼女の菩提を弔うために出家した弁に対して、ある種の親近感・連帯感をおぼえて、その尼姿を見ようとして几帳の隔てを除いているのであって、男女の関係にある明石君の容姿に心惹かれる源氏の場合とは異なっている。

しかしながら理由はともかくとして、隠れている女性の姿かたちをつぶさに見るために、視線を遮る几帳を男性がとり退けるという設定が見て取れるという点では、前節で上げた「押しやる」の例と重なると思われる。

たしかに次にあげる柏木巻の例などを見ても、この傾向は明らかである。

宮（＝女三宮）も起きぬたまひて、御髪みかみの末のところせう広ひろりたるを、いと苦しと思して、額ぬかなど撫なでつけておはするに、（源氏が）几帳を引きやりてゐたまへば、（三宮は）いと恥ちづかしくて背きたまへる、いとど小さう細りたまひて、御髪は惜しきみこえて長う削うぎたりければ、背後うしろはことにけぢめも見えたまはぬほどなり。

（柏木）

源氏の妻でありながら、柏木衛門督との密通によって、彼の子を産んでしまった女三宮は、罪の意識から出家を望み、父・朱雀院の手によって落飾する。宮にいまだ執着する源氏は、その美しい尼姿を見ようと、宮との間を隔てる几帳を「引きや」つて座し、恥ちずかしさに顔

を背ける宮に向かつて、未練にも恋情を訴えるという展開。

出家という手段によって、自分の手の届かぬ境涯へと逃れようとする女。今さら無駄なことを承知で、なおかつそれを引き留めようとする男。「几帳を引きやり」という行為は、そんな男の執心の象徴と読める。

実際のところは、「押しやる」の場合でも見えたこととく、女性の前の几帳が、他の女性の手で引き退けられる例や、女房たちが几帳を押しつけている様子に心の緩みを見て取る例も存在している。

霧のいと深き朝あした、いたくそそのかされたまひて、（源氏は）ねぶたげなる気色にうち嘆なげきつつ出でたまふを、（侍女の）中将のおもと、御格子みかうし一間ひとま上げて、見たてまつり送りたまへとおぼしく、御几帳みきやうひきやりたれば、（御息所は）御頭みづかもたげて見出みだしたまへり。

（夕顔）

宮（＝女三宮）の御前おまへの方なたを後目しりめに見れば、例の、ことにをさまらぬけはひどもして、色々こぼれ出でたる御簾みすだのつまづま透影すきかげなど、春の手向たむけの幣袋ぬきぶくろにやとおぼゆ。御几帳みきやうどもしどけなく引きやりつつ、人げ近く世づきてぞ見ゆるに、唐猫からねこのいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫追ねこおひ続きて、にはかに御簾みすだのつまより走り出づるに、人々おびえ騒さわぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣きぬの音ねなひ、耳みみかしがましき心地す。（若菜・上）夕顔巻の例は、六条御息所の邸での出来事。昨夜久しぶりに訪れた源氏が、明け方に帰って行くとする、その後ろ手を帳台から見送れるようにという配慮から、中将という女房が御息所の傍に立ててあつた几帳を、引き退けるのである。

世間体を憚はげつて源氏に帰りを促したものの、本当のところは彼を引き留めておきたい、そんな御息所の内心の執着を、中将という女房は素早く理解して、主人の心を代弁するかのよう几帳を引きやつて視界を拓く。

したがってこの場合、主人の前の几帳を引きやるという行為は、決して非難されるべきことではない。むしろこういう気配りの優れた侍女を召し使っていることが、この主人の風雅さを証し立てているのである。

それと対照的なのが若菜・上巻の例。こちらは六条院南の町の寢殿の様子である。うらかな春の午後、蹴鞠に興ずる若者たちを見るということで、大勢の女性たちが御簾際に立っている。彼女たちの、色とりどりの装束が、御簾からのぞき、あるいは透けて見えるのが、さながら春の女神・佐保姫に手向ける幣の袋のごとくだったというのである。

一見華やかで風雅な場面のようにだが、「一例の、ことにをさまらぬけはひ」と言い、「しどけなく」「人げ近く世づきてぞ見ゆる」と言い、物語の評価は手厳しい。浮ついて、奥ゆかしさもなく、いかにも男馴れした感じがするという非難である。そうした女房たちのだらけた緊張感の欠如を象徴するのが、「御几帳どもしどけなく引きやり」という体たらくなのだと読み取れよう。第四節で引いた浮舟巻の例、几帳を押しやっている心の緩みから、匂宮の侵入という事態を招いたくだりと類似した状況であることは、改めて注意せねばなるまい。

こうした女房たちのたしなみのなさは、すなわちその主人の品格の反映、だというのが当時の考え方。だからこそこの直後、くだんの唐猫の首綱が簾に引きかかって、大きく前方に引つ張られた隙間から、女三宮の立ち姿が夕霧・柏木両人の眼にさらされることになり、柏木の心を悩乱させることになった。結果的にこの後の密通事件の契機となっていく、というのが物語の論理なのである。

見方を換えれば、几帳をだらしなく引きのけているというこの女性の姿勢は、男の欲望・衝動に対して、身の処し方も知らぬというたしなみのなさを象徴しているようにも読める。

以上、『枕草子』『源氏物語』における用例を概観することによって、几帳という調度に対していだから、当時の通念的な心象が明らかになる。

それは人目を遮る機能を有する調度であるゆえに、人と人との間に隔てを設ける心象を生ずる。したがってその陰に隠れようとする行為は、人目を憚る奥ゆかしさの心象をはらみ、逆にこの隔てを取り除こうとする行為からは、陰に隠れている相手に近づきたいという意志の現れが感じられる。

さらにそういう能動的な行為に向かうのは、多くの場合男性というのが通念的な行き方であり、女性がこれを行うと——夕顔巻での中将の場合のごとく、きわめて稀な例を除いて——ふしだらで、だらしない生活態度の現れという色彩を帯びるのが普通。逆に陰に隠れようとする行為は、貴女らしい趣や淑女としてのたしなみを感じさせるのである。

六、几帳を押しやる後の宮

このような同時代的な心象を踏まえて、改めて「清涼殿の丑寅の隅の」段における定子の行動を見たい。彼女は「御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへる」とある。これが当時の通念に照らし、非女性的な行動であったということについては、先述したごとくである。

もちろん当段はいわゆる日記的章段であって、実録的な性格が強いのであるから、虚構の物語と同列には論じられないことは言うまでもない。しかしながら、前節でまとめたごとく、もしも女性の立場でありながら几帳を押しやるという行為が、いかにもぶしつけで不都合だという感覚が共有されていたとするなら、実際に中宮がこうした行動をとったのだとしても、それについて無視していれば、それで済んだ

はずである。

たとえば、帝が食事のために席を立てて行き、そのお供をした伊周大納言が、再び桜の花瓶のもとに着座するや、「月も日も……」と朗唱したとのみ記述すれば、全体のめでたさを損なうことなく、几帳のことに触れずに済ませることが可能である。それをしなかった、と言うより、中宮が自ら几帳を押しやって、下長押のもとまで出てきたということを敢えて書きとめ、当時の常識的な女性美の表現からすれば忌避されるべきその行為を、「めでたき」と讚美しようとした理由はいかなるものであったのか。

ちなみに第二節で引用した「関白殿、二月二十一日に」段や「松の木立高き所の」段の用例からして、『枕草子』全体としての姿勢が、「女性は（他者の眼を逃れるために）几帳の陰に隠れるべき」という通念から逸脱しているわけではないし、とりわけ「宮にはじめてまゐりたるころ」段の記述を見れば、私人としてのこの作者も、こうした同時代的発想から逃れ得ていないことは明白なのである。だとすればいっそう、中宮女房としての立場から当段を描くに当たって、几帳を押しやる行為者としての定子像を書き記そうとした『枕草子』の意図を、探って行かねばならないであろう。

実のところこの作品には、中宮定子の行動をめぐって同様な描写が見えるのである。

（私が）まゐりたれば、はじめ下りける人、物見えぬべき端

に、八九人ばかりにけり。（中宮は）一尺余、二尺ばかりの長

押の上におはします。（大納言殿たちは）「ここに（私が）立ち

隠して、率てまゐりたり」と申したまへば、（中宮は）「いづら」

とて、御几帳のこなたに出でさせたまへり。まだ御裳、唐の御衣

奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣どもよろしからむや

は。中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重襲の織物に、赤色の唐の

御衣、地摺の唐の薄物に象嵌重ねたる御裳など奉りて、物の色な

どは、さらになべてのに似るべきやうもなし。「われをばいかが見る」と仰せらる。「いみじうなむ候ひつる」なども、言に出でては、世の常にのみこそ。〔関白殿、二月二十一日に〕段

「関白殿、二月二十一日に」の段の一節で、法興院積善寺で行われる法会に参列される中宮のお供をした折の回想。第二節に引用したくだりの直前の場面であり、詳細な衣装描写を通して、晴の装束を見事に着こなした宮の美しさを眺めている清少納言の陶然たる感動が伝わって来る。だが注意すべき点は、参上した少納言を前に、「御几帳のこなたに出でさせたまへり」とあること。すなわち定子中宮は、ここでも几帳の陰に隠れてはいないで、自らその前に進み出たというのである。当時の女性としては型破りともとれるこの行為は、直後に先述のごとく几帳のうしろに座す上臈女房たちが描かれることで、いっそう鮮やかな対照を成す。

さらにこの章段が、清少納言の出仕してまだ間もないころの出来事であるということとを考慮に入れると、いっそう興味深い。「宮にはじめてまゐりたるころ」段では、先述のごとく「もののはづかしきことの数知らず、涙も落ち」そうになりながら「三尺の御几帳のうしろに候ふ」と、新参当時の心境を述べているが、そういう作者の眼の前に、自分よりもはるかに高貴な若き女主人が、何の抵抗もないかのようにならぬ。このころは、自分のことき今参りの女房に声をかけて、それはつい最近まで、平凡な家庭人ではなかった女性にとつて、大いなる驚異以外の何ものでもなかったのではあるまいか。

この段の事件年次は正暦五（九九四）年二月であり、くだんの「清涼殿の丑寅の隅の」段も同年の春の出来事であると考えられている。

この前年三月には定子の妹・原子が東宮妃となり、この年八月に兄の伊周は、弱冠二一歳で内大臣に任じられる。つまり関白道隆にとつては、まさに絶頂というべき時代の出来事なのである。

そういう栄華の盛りにあつて、この宮様は上品ぶつて奥にとり澄ま

しているのではなく、自分の召し使っている女房たちに積極的に声をかけるべく、几帳の隔てをとり退けて、長押の際までお出ましになる。そういう開放的な親しみやすい後宮なのだという主張が、これらの記述から読み取れるだろう。

それにしても、「御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへる」にしろ、「御几帳のこなたに出でさせたまへり」にしろ、それらをして「何となくたためたき」のような中宮讚美に収斂させる表現が、当時の女性らしさの基準値に照らして、同時代読者にたやすく受け入れられたかと言えば、疑わしいと言わざるを得まい。

たとえば『栄花物語』に見える、次のような表現と比較してみれば、一目瞭然たるどころ。

利宗本藤
(帝は)宮に御対面あるに、御几帳引き寄せていとけ遠くもてなしきこえたまへるほどもことわりなれど、御殿油遠くとりなして、隔てなきさまにて泣きみ笑ひみ聞えさせたまふに、古になほたちかへる御心の出でくれば、宮、「いといとけしからぬことなり」など、よろづに申させたまへど、それをも聞き召し入れぬさまに乱れさせたまふほども、かたはらいたげなり。

『栄花』浦々の別

これは帝との対面のために、第一皇女脩子内親王とともに、定子中宮が内裏に参入した時の様子。史実的には長徳三(九九七)年六月二二日のことである。この前年花山院への不敬事件によって、伊周・隆家兄弟が断罪、左遷された際、中宮は自ら鉢を取って髪をおろし出家している。当時彼女は懐妊中で、一二月一六日に出産。すると一条天皇は子どもに会いたいと望み、中宮の参内を幾度も要請し、ついにこの日実現の運びとなった。

当初中宮は、罪人の妹であることや、出家者の立場を慮って、「御几帳引き寄せていとけ遠くもてなし」ていたのだが、帝は直接の対面を希望されて、燈火を遠ざけたうえで几帳の隔てを取りやって語り

合ったという。ところがそうしているうちに、昔の恋情が湧き上がって来るのを留めがたく、ついに帝は中宮の制止にも耳を貸さず、再び彼女を寵愛されるようになったというのである。

自らの境遇を憚って几帳を引き寄せる女と、彼女への執着を捨てきれず、その几帳を押しつける男。もの陰に隠れる行為が漂わせる貴女らしい奥ゆかしさと、卑下の態度が、男の同情心をそそり、女に対するいとおしさがいつそう募ってくるという設定。几帳という調度のはらむ同時代的心象に、まさにびたりと当てはまる状況なのである。

前々年長徳元年四月の父関白・道隆の死去に端を発し、長徳二年の兄弟の左遷、さらにその十月の母・貴子の死去と、不幸は立て続きにこの女性を襲い、このころは涙の乾く間とてなかつた時期であつたことであろう。しかも自家の政治的な惨敗とは裏腹に、道長の権勢はますます強大になってゆく。そんな絶望的な状況下で、唯一の慶事が脩子内親王の誕生であつたし、それを機に帝との再会が叶うようになったのも、思いがけない幸運と感ぜられたであろう。

そんな定子の状況の心細さ・不安さを知っている読者——同時代の読者たちは皆、彼女の悲運を知つた上で『枕草子』を読んだわけであるが——にとつては、『栄花』の表現と『枕』のそれとの、いずれが受け入れやすいものであつたかということについては贅言を要すまい。

しかしながら『枕草子』は定子中宮を、『栄花』のごとくなよめいた女性的存在として描出することを、潔しとしなかつた。この作品の中の若き女主人の人物像を、あくまでも自らの意志で隔てを取りやり、敢然と几帳の外へと進み出る行動者として位置づけたのであつた。

あの日、法興院積善寺のあの春の一日、高さ一尺以上もあろうかという長押の際に出でこられた宮様は、莞爾としてこの私に「われをばいかが見る」と問い掛けられた。自らの美しさに自信を持ち、わが魅力を十分に理解した者にのみ許された笑顔。まさに後光の射すごとき姿であつた。

それはまだ里人気分^①の抜けきれぬ清少納言にとって、それまでの概念を打ち破るような、衝撃的で斬新な女性美の顕示と映つたのではなからうか。

七、「今めかしう気近き」家風

このように異端とも取れるほどに新しく、個性的な美の表現は、独り定子のみに備わつた資質ではなく、彼女の家——中閨白家の気風であつたと思しい。

二月には内大臣殿（内大臣殿）（＝道隆）の大姫君（大姫君）（＝定子）内へ参らせたまふ有様、いみじうののしらせたまへり。殿の有様、北の方など宮仕にならひたまへれば、いたう奥深なることをば、いとわろきものに思して、今めかしう気近き御有様なり。

〔『栄花物語』様々の喜び〕

『栄花物語』様々の喜びの巻の一節、定子の入内が世間の人の噂になる程の盛儀であつたというくだりである。

注目したいのは、『栄花』が「殿の有様」、すなわちこの家の気風として、「いたう奥深なることをば、いとわろきもの」とみなすという姿勢だつたと述べられていることである。「奥深」であることを「いとわろき」と見るということは、換言すればその対になる「端近」を推奨するということになる。これは「養ハレテ深閨ニ在リ人未ダ識ラズ」（「長恨歌」より）などに見られるように、「深閨」＝他者に見られぬ所という当時の美意識に照らすと、かなり異色な考え方であらう。先述のように当時の貴人、特に女性にとっては、他者の目にさらされることは忌避すべきことで、したがつてその危惧のなるべく少ない場所こそが身を置くのに理想的とされたわけである。住居空間で言えば奥の間が高貴の人にふさわしく、端近な場所は軽々しい場所ということになるし、几帳の陰に隠れるというのも、そうすることで当座的

にそこを「奥」と仮構する行為と考えられよう。

たとえば『伊勢物語』第六段、いわゆる芥川の段では、男にさらわれた貴女が、夜道で草に置いた露がきらりと光つたのを見て、「かれは何ぞ」と問うたと描かれる。この女性は夜露も見たことがないくらい深窓の姫君だつたのだという表現である。『伊勢』ではこの女性を二条后だとしているから、后になれるほどの高貴な女性であれば、「養ハレテ深閨ニ在リ」という育ちが似つかわしいのであろう。

一方、『源氏物語』若菜・上巻には、蹴鞠に興ずる若者たちを眺めるため御簾際に立つていて、引き上げられた御簾の隙間から、柏木に姿を見られてしまった女三宮の不用心さを、夕霧大將が軽侮する場面がある。彼は宮の「いと端近なりつるありさま」を「軽々し」と感じ、憧れの紫上の奥ゆかしさを思い比べて、この宮に対する父・光源氏の愛情が薄いのも、このように女性としてのたしなみが欠落しているのが原因なのだと推量するのである。「端近」は貴女にふさわしからざる場所という主張が、はつきりと見て取れる。

こういう通念と、中閨白家の発想は、真つ向から対立するものである。それでは、それゆえにこの家の気風が世人の軽蔑を集めたかというところ、「今めかしう気近き御有様」すなわち陽気に華やいで、親しみやすいモダンな雰囲気であつたと、『栄花物語』においては好評であることがわかる。

しかもそのような気風が、何によつて涵養されたかと言えば、それは「北の方など宮仕にならひ」、つまり奥方の貴子が、ベテランの宮仕え女性だつたことによるのだというのである。

そもそもこの貴子という女性を北の方として迎えたところに、道隆という人物の型破りな結婚観がうかがえるというところは、すでに論じているのでここでは詳しく述べないが、そこでも触れたごとく、不特定多数の男性から姿を見られてしまう宮仕え女性のことを、軽薄で身持ちの悪い者と考える一般的風潮のあつたことは、『枕草子』「生ひさ

きなく、まめやかに」段でも明らかである。

宮仕へする人を、あはあはしうわるき事に言ひ思ひたる男などこそ、いとにくけれ。げに、そもまたさる事ぞかし。かけまくも畏き御前をはじめたてまつりて、上達部、殿上人、五位、四位はさらにいいはず、見ぬ人は少なくこそあらめ。女房の従者、その里より来る者、長女、御厠人の従者、礫瓦といふまで、いつかはそれを恥ぢ隠れたりし。

上は天皇から、下は「礫瓦」というべき賤の男に至るまで、恥ずかしがつて身を隠してなどいられぬのが、宮仕への宿命である。「養在深聞人未識」という育ちの女性とは、真反対の立場だと言えよう。

だからそういうふうには、姿かたちから知性やもの言いまで、あまるところなく人に知られた女性を、「上などいひて、かしづき据ゑたらむに、心にくからずおぼえむ、ことわりなれど」、すなわち奥方として大事に扱ふことは、男性にとって魅力を感じないというのも解らぬ理屈ではない。けれど宮仕へすることで、知見が広がるという利点もある。深窓の姫君がそのまま妻や母となったような、何一つ世間を知らない女性などより、頼れる相談相手として夫を支援できる、しつかり者の妻の方が、ずっと良いとは思わないのかと、なかなか激しい論調は、それほど当時の男性たちが「人未識」を重んじていたことの表われと読める。

だが道隆は、そういう通念的な結婚観と真つ向から対立して、摂関家の惣領たる立場でありながら、高階貴子を北の方に据えた。彼女は円融帝の朝廷で、「高内侍」と人に知られた才女。当時としては破格の縁組であった。ゆくゆくはこの女性が産むであろう女子を、帝のもとに入内させ、男皇子をもうけるといふ、将来の展望のもとにであったことは言を俟たない。

道隆のような男の眼からすれば、「人未識」を第一の取り柄に、几帳の陰に隠れてばかりいるような女性は、飽き足らなく思われたので

あろう。

そうして一方では、彼と同様こうした固定化された女性らしさを古臭いと感じ、新しい女性美を求める向きが存在したのも事実だったようである。

「いづら、宮（＝女三宮）は」と（帝は）聞えたまへば、（御息所が）「こなたに」と聞えたまへれば、（三宮は）みざり出でたまへり。十二三ばかりにて、いとうつくしげに気高きさましたり。

けぢか
気近き御前はひぞあらせまほしき。——中略——母御息所におぼえたまへりと（帝は）御覽すべし。御息所もきよげにおはすれど、もの老い老いしく、いかにぞやおはして、すこし古体なるけはひ有様して、見まほしきはひやしたまはざらん。——中略——母御息所、三尺の几帳を御身にそへたまへるを、几帳ながらみざり寄りたまふほど、なま心づきなく御覽せらるるに、

《栄花》月の宴

これは『栄花物語』月の宴巻の一節、村上天皇が按察の更衣（藤原在衡女）腹の第三皇女・保子内親王と対面するくだりである。宮は可憐だけれど、気高さが目立っているように思える。「気近き御前はひ」を加えたいと見ていると、母の御息所が「几帳ながらみざり」って来るのを見て、幻滅したというのである。それまで上品で女性らしいと評されてきた「三尺の几帳を御身にそへ」る行為が、「古体」、すなわち前時代的で古臭いと感じられるようになっており、変って希求されたのは「気近き御前はひ」だったという点に注目したい。

村上帝は英君であると同時に、たいへんな色好みであったことで知られ、その宮廷には華やかな逸話をまとった女性たちが存在していた。才色兼備を謳われた宣耀殿女御・藤原芳子などは特に有名で、当段「清涼殿の丑寅の隅の」にも、その風雅な逸話が紹介されている。

『枕草子』には他にも、兵衛という女蔵人の風流譚が記され、月夜に雪を盛った容器に梅の枝を挿して下賜された彼女が、「雪月花の時」

と『白氏文集』の詩句を引いて応えたことを、帝から絶賛されたところ（村上の先帝の御時に）段。

それまで漢才は、女性にとつて無用の長物とされてきたが、「歌など詠むは世の常なり。かく折にあひたる事なむ言ひがたき」という帝の言葉の中に、従来の女らしさの枠を超えた、新たな女性美が求められる時代になっていることが明らかであろう。そういう村上朝の風儀を理想視する定子後宮が、こちらもまた女性の漢才を看板に掲げたという事実は興味深い、その点は別稿に譲って、ここではそれまで当たり前のように受け入れられて来た「女性的」な生き方——女は奥深く控えているべきだという通念に対して、敢然として否を突きつけた、その鮮やかに新しい姿勢の典型として、「御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせたまへる」という行動を位置付けたいのである。

前稿で述べたところだが、当段には古歌の試問をめぐって二つの風流譚が紹介されるが、それが二つながら定子中宮によってなされていることは注目に値する。天皇御前であるにもかかわらず、すべてが中宮主導で事が運ばれ、帝はあくまでも聴衆、もつと言えは賞讃者の一人なのである。そうしてそういう役回りに満足したからこそ、中閨白家没落の後も、定子への帝寵の衰えることがなかったのだと推察される。このような能動的な中宮の姿勢は、几帳を押しやって進み出る気概と、確かに通い合っている。

自分の意志と考えを持って行動する女君。これこそが他でもない、道隆が高内侍との協働によって産みだそうとした「今めかしき」、これまでになかった新しい女性の魅力だったのだと言えよう。

実際のところ、この「今めかしう気近き御有様」は、中閨白家の気風を語る表現として、『采花』では繰り返して用いられている。

故閨白殿（＝道隆）の御有様は、いとものはなやかに今めかしう愛敬づきて気近うぞありしかば、中宮の御方は、殿上人も、細殿つねにゆかしうあらまほしげにぞ思ひたりし。弘徽殿（＝公季

女・義子）、承香殿（＝顕光女・元子）、暗部屋（＝道兼女・尊子）など参りこませたまへり。されどさるべき御子たちも出でおはしまさで、中宮のみこそは、かくて御子たちあまたおはしますめれ。
〔采花〕輝く藤壺

これは道長の娘・彰子が入内したころの記事。彰子に先立ち、中閨白家の凋落を見定めて次々に入内した女御たちが並び立ち、にぎやかなはずの内裏だが、実際には彼女たちへの寵は薄く、定子のみが帝の愛の証としての御子をもうけていたというのである。

さらに殿上人たちも、中閨白家の華やいだ親しみやすい気風を慕い、定子後宮を風雅な遊び所として理想的と評価していたと記す。権勢の上では完膚なきまで道長方に圧され、政治的・経済的な後ろ楯を全く欠いた無力な後の宮が、唯一失わずに済んだものは人々を魅了する力だったというわけである。言わば「いたう奥深なることをば、いとわろきもの」という考え方は、結果的にこの家の存在意義を支えたのであった。

※本文の引用はいずれも小学館新編日本古典文学全集に拠りつつ、表記等適宜に改めた。また論の展開上必要な箇所は、他の注釈本に拠りつつその旨を示し、（＝）（）の形で解釈や注を私に補った。

注

（一）清涼殿北に設けられた后妃のための部屋。二か所あり、東側を「弘徽殿の上御局」、西を「藤壺の上御局」と称す。ここは弘徽殿の上御局。

（二）これについて新潮日本古典集成本の頭注では、「上御局と北の簀子敷との境の下長押」とあり、傍注には「端近に」と見える。また角川文庫本でも、脚注に「下長押。簀子との境」とあり、巻末現代語訳では「簀子との境の御簾ぎわまで」とある。これらに従えば、中宮は廂の間に伺候する女房たちに混じって端近にいたことになる。なお、この二書の他は、小学館新・旧全集

- 本、岩波新・旧大系本、和泉書院古典叢書本などでは特別な記述は見えない。
- (3) 薫は、実際には女三宮と柏木衛門督の密通の結果、生まれた。弁は、その秘密を知っている少数の人間の一人。
- (4) もちろん作中には視線を遮る機能のみの用例もある。たとえば女三宮が柏木の手紙を読むのを、他の女房の眼から遮るために、小侍従という女房が几帳で隠すという場面の用例、「人のまゐるにいと苦しくて、御几帳引き寄せて去りぬ」(若菜・下)などは典型的。
- (5) 中央公論社『源氏物語大成』及び岩波書店新日本古典文学大系『源氏物語索引』による数値。
- (6) この箇所、小学館新全集本・新潮古典集成本では「引きやり」。ここでは前記『源氏大成』・『源氏索引』を参照しつつ、岩波新大系の本文にしたがった。
- (7) 後の薫。前出(3)参照。
- (8) 段中に「あたらしうまゐりたる人々」とか、「心知らざらむ人」とか、作者が新参であることを示す言葉が散見される。
- (9) いわゆる長徳の政変。長徳二年一月、伊周・隆家の兄弟が従者に命じて花山法皇に矢を射かけるといふ事件が出来、この罪により伊周は大宰権帥に、隆家は出雲権守に左遷。
- (10) 史実としては、正暦元(九九〇)年二月二五日のこと。
- (11) 「中関白と呼ばれた人——藤原道隆の創ったもの——」『国語と国文学』第七九巻第五号 平14・5、「定子後宮の風儀をめぐって——『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」段を中心に」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第六四巻 平二七年、等参照。
- (12) 「脱」女性「性に挑む後宮——『枕草子』「故殿の御服のころ」段を中心に」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第六五巻 平二八年参照。
- (13) 前記「定子後宮の風儀をめぐって——『枕草子』「清涼殿の丑寅の隅の」段を中心に」参照。

(平成三十年九月二十六日受理)